

発達障害の疑いのある子どもへの保育

～ 自閉症スペクトラム障害を中心に ～

Nurture to the child suspected of Developmental Disability

～ Focusing on Autism Spectrum Disorder ～

森定 美也子

Miyako Morisada

要 約

「発達障害」とは、自閉症スペクトラム障害、学習障害、注意欠陥多動性障害などの様々な脳機能の障害の総称である。本論では、発達障害のうち、特に自閉スペクトラム障害(ASD)に焦点を当てて、乳幼児期の発達過程や保育のポイントについて論じた。生まれつき表情を読み取ることに困難さを持つ ASD 児は、乳幼児期に養育者の表情などの非言語的なコミュニケーションを理解しにくく、健常児よりもゆっくと、心の基礎となる基本的信頼感を形成していく。その形成を支援していくため、親や保育士が ASD 児のファンタジーの世界に寄り添って、共感性を育てていくことが重要である。保育場面では、ASD 児の特徴を理解しながら、周囲の状況が読めないゆえの困難さが起こらないように先の見通しを伝え、本人の得意な行動を評価しつつ、特性を生かした過ごし方ができるような支援が必要となる。

はじめに

「発達障害」とは、自閉症スペクトラム障害(Autism Spectrum Disorder:以下 ASD)、学習障害(Learning Disability:LD)、注意欠陥多動性障害(Attention Deficit Hyperactivity Disorder:ADHD)などの様々な脳機能の障害の総称である。発達障害は、学齢期にならないと確定診断が下りない例が多いため、学齢期以前は発達障害の疑いのある、「気になる子」といわれる。

文部科学省の2012年の調査によると、通常学級に在籍する児童・生徒の中で「気になる子」は全体の約6.5%存在している。海外の研究や、最近各地で行われるようになった5歳児健診の結果によると、「気になる子」10%前後みられることが分かっている。

例えば、和歌山県立医科大学小児成育医療支援室の瀬戸他(2014)の五歳児相談事業の調査によれば、平成25年度の公立の幼稚園、保育園の対象児2978名のうち、気になる子どもは14.9%(443名)存在している。

こうした「気になる子」の確定診断は小学校へ入ってからとなるが、実際には学齢期以前、保育園や幼稚園の時期から、

様々な問題が見られる。「発達障害があるかも」と決めつけるのではなく、子どもの特性に合わせて理解し、支援していくことは大切である。園で理解されず、適切な支援を受けない状態であると、学習や対人関係など様々ことにつまずいてしまう。不登校になる、いじめを受けて人間不信に陥る、うつになるなどの二次障害を起こしてしまうことも多い。

本論では、発達障害のうち、特に自閉スペクトラム障害に焦点を当てて、乳幼児期の発達過程や保育のポイントについて論じたい。

自閉症スペクトラム障害 (ASD) とは

自閉症スペクトラム障害とは、知的障害を伴うような重い自閉症から、言葉でのコミュニケーションがある程度可能なアスペルガー症候群まで、重度から軽度までのすべての「自閉的な」障害を包括的にとらえた概念である。重度の自閉症児は、1歳半健診でピックアップされ、2歳前後に確定診断が下ることが多いが、障害の程度が比較的軽度のアスペルガー症候群は、マニャックな知識を話すことなどから3歳児健診の場でも気づかれにくい。周囲の気づきがなければ、大人になっ

でも自らの特性に気づかず、社会に出てから困難に直面することもある。しかし、保育場面のように集団行動が必要とされるシチュエーションでは、軽度のアスペルガー症候群でも、集団行動の難しさが目立つため、家庭よりも、その子どもの問題点に気づきやすい。

(1) ASD の原因

ASD 児が抱える困難さの一番の問題点は、表情を読むことが難しい点にある。ASD 児において、表情コミュニケーションの理解がなぜうまくできないのか、その脳のメカニズムは不明であったが、佐藤弥ら(2012)の研究グループは、ASD 群と定型発達群を対象として、表情を見ている間の脳活動を機能的磁気共鳴画像法(fMRI)で計測することで、この問題を検討した。その結果、ASD 群では、脳の下前頭回などの活動が低いことが示された。下前頭回は、他者の運動と自分の運動を結び付け、真似をしたり共感したりする基礎となる「ミラーニューロン」があるといわれている部位である。さらに、神経ネットワークの分析の結果、定型発達群では上側頭溝(表情の視覚分析に関わる)と下前頭回が機能的に結合する神経回路が形成されているのに対し、ASD 群ではこの回路がうまくはたっていないことが示された。

これらの知見は、ASD における表情コミュニケーションの問題が、相手の表情に自動的に共鳴するミラーニューロンの活動不全に起因することを示唆するものである。

(2) ASD の特徴

このように、生まれつき表情を読み取ることに困難さを持つ ASD 児は、乳幼児期に養育者の笑顔や表情などの非言語的なコミュニケーションを理解しにくい。これは、基本的信頼感の形成に影響を及ぼす。通常、健常児は、ミラーニューロンを用いて、相手の気持ちを読み取る「間主観性の能力」を持って生まれ、生まれ落ちた時から、養育者の表情を読み取って成長していく。養育者も、乳児の表情を読み取って、気持ちを理解して合わせていく「情動調律」を行い、親子のコミュニケーションが作られる。このようなコミュニケーションが積み重なって基本的信頼が形成され、心の基礎になっていく。

しかし、基本的な信頼関係が形成しにくい ASD 児は、養育者の表情から、意図が理解できず、赤ちゃん時代から苦労していると考えられる。間主観性の概念を提唱したトレヴァーセン(1998)も、自閉症は間主観性の障害と考えている。

ASD の診断時期については、自閉の程度が重い場合は知的障害も伴うことが多いので、2 歳前後で確定診断が下りる。しかし、軽い場合は、言葉の遅れも少なく、特に電車など自分の興味のあることについては、難しい言葉も用いて話すため、家庭や 1 対1の診察場面では、コミュニケーションの困難さが把握できないことがある。彼らのコミュニケーションの問題点は、園での集団生活でより明らかとなってくる。ASD の診断基準は、社会性の障害、コミュニケーションの障害、想像力の障害とそれに伴うこだわり行動の3点であるが、以下に保育場面でよくみられる、ASD 児の特徴についてまとめてみたい。

① 相手の表情や、非言語コミュニケーションを理解するのが苦手

非言語コミュニケーションとは、視線、表情、身ぶり(ジェスチャー)、声の調子やイントネーション(抑揚)など、言葉以外のコミュニケーションのことである。ミラーニューロンの働きが不全で、相手の表情などが読み取りにくいことからこの問題が生じる。そのため、クラスの友達が喧嘩をしているのに気づかず、話しかけたり、相手が不機嫌であることがわからず、適切な距離が取れないなど、その場の雰囲気を読んで状況に合わせて行動を調整していくことができない。このような特徴は、特に集団場面で現れるため、家庭での様子と園での様子が全く異なってくることもある。

② イントネーション(抑揚)の使い分けができない、

ミラーニューロンは視覚的な共感だけでなく、聴覚的な共感性にも関係してくる。その聴覚的なミラーニューロンの働きが不全であるため、相手の声の調子を読み取ることができない。このため、自分の発する声も、単調で独特な声の調子で話し、声の大きさの調整ができず、大きな声で話すことが多い。

また、知的障害のないアスペルガー症候群のようなケースの言語の習得において、養育者との会話よりも、好きなビデオのセリフを丸暗記するなどして言葉を習得していくため、方言が出にくいという特徴もある。

③ 周囲の状況を見たり、聞いたりする力が弱い

ASD 児は、視覚的にも、聴覚的にも、情報を理解することが難しいが、特に聴覚的な情報はキャッチしにくい。また、キャッチした情報を理解するのに時間がかかるため、その場の状

況をとらえられず、何をしたらいいのか、はっきりと分からずにいることが多い。見通しを理解する力も弱く、行事など、いつもと違うことをするのが苦手である。

④ 聴覚・視覚・触覚・嗅覚・味覚の感覚過敏

ASD 児は、さまざまな感覚の過敏さを持っている。どの感覚が過敏であるかは、ケースによって異なるが、特に聴覚の感覚過敏を持つ子どもが多い。普通の音量のアンパンマンマーチでも、ものすごい音量に聞こえてしまい、その場にいることがむづかしい場合もある。音が聞こえない場所に移動したり、耳栓を使うことが必要となる。臭いや、食べた時の口の中の感触がきらいだといった理由で、偏食も見られる。

半面、痛み鈍感なところもあり、転んですりむいて血が出ていても、痛そうではなくケロッとしていることもある。

③ 不器用さがある

特に、軽度のアスペルガー症候群のケースで手先や運動能力の不器用さが見られる。手先が不器用で、字を書くのが下手、姿勢が悪い、バランスが悪い、歩き方・走り方がぎこちないなど、学習障害や発達性協調運動障害などと重なっているケースも多い。

(3) ASD 児への対応

上記のような特徴を持つ ASD 児に対して、次のような対応が望まれる。

① 先の見通しを「視覚的手がかり」を用いて知らせる

登園時に 1 日のスケジュールを伝えたり、次の活動を写真や絵カードを用いた「視覚的手がかり」を用いて先の見通しを知らせる。

② 対人関係について具体的に教えていく

保育者が間に立って、周囲の子どもとかかわる機会を作ったり、相手の気持ちを説明することが大切である。その際には、耳からの情報は理解しにくいので、棒人形でもよいので人の絵を描いて、吹き出しを付けて説明する「コミック会話」という方法が有効である。視覚的にもわかりやすい「コミック会話」を通じて、相手の気持ちや、どのように行動したらよかったのか

などを説明していく。

③ ASD 児のファンタジーの世界を尊重し、信頼関係を形成する。

トレヴァーセン(1988)は、自閉症は間主観性の障害であるという考えから、ASD 児と進んでコンタクトをとり、その子が示す対人的興味や遊びのどのようなサインであれ受け入れようとする、ASD の間主観性の未熟さを補完するような受容的なアプローチを推奨している。このようなアプローチを具体的に考える上で、辻井(1996)の「自閉的ファンタジー」の考え方が挙げられる。辻井(1996)は、ASD 者が持つ特有の世界を「自閉的ファンタジー」と命名し、そして、極めてユニークなファンタジックな遊びから、徐々に現実感を持った現実場面での葛藤の再現をうかがわせるような遊びへ、共通の話題や自分のありようについて言葉によってやりとりしていけるようになり、情緒的な自己調整機能の発達に寄与すると述べている。吉岡・古田(2011)は、固執するアニメの反復などを、ASD 児の内的世界と歯あまり関係のないパターン化された表彰として切り捨ててしまうことなく、原初的な ASD 児の内的世界にできる限り寄り添い、彼らのファンタジーは意味あるものとしてとらえていく重要性を指摘している。

保育士が ASD 児のファンタジーの世界に寄り添い、理解してあげることを通して、ASD 児は「自分のことをわかってくれる人がいる」ということを実感し、保育士との間に信頼関係を形成していく。

保育園における ASD 児の事例

対人関係において、様々な困難さを抱える ASD の子どもであるが、保育士の理解ある対応によって、パニックや二女障害などを起こさずに、成長していくことが可能である。

ここで保育場面での ASD 児の 2 つの事例を通して、理解や対応のポイントについて考えていきたい。以下のケースは、プライバシー保護の観点から、よくあるケースをいくつか組合せて構成した事例である。在園中に自閉症と診断されるケースは、言葉が出ない重度のケースから、多少言葉が出る、自閉症の中でも比較的軽度のケースまで、様々である。ここでは、後者の比較的軽度の自閉症のケースである A 君と、アスペルガー症候群の疑いのある B 君の事例を紹介する。発達段階ごとの成長の様子や対応のポイントについて、半年ごとにその成長を追っていく。

(1) 自閉症と診断されたA君

A君は1歳半から保育園に通園している。

【1歳半から2歳の時期】

〈園での生活の様子〉

名前を呼んでも止まることができない。名前が自分のことを指しているという、名前の意味がわかっていない様子である。保育士の指示が理解できず、言葉も出ていない。

〈遊びの様子〉

電車で遊ぶことを好むが、遊びにおいても集中が続かない。高い所や、回るものを好む。普段は全く目が合わないが、保育士とタイヤ転がしをして遊ぶときは、少し目が合う。

*ASD児は、回るものや高い所を好む傾向がある。

〈保護者の動き〉

1歳半健診を経て、保健所の経過観察相談に定期的に通うこととなった。

【2歳から2歳半の時期】

〈園での生活の様子〉

自分の靴をいれる場所が分かるようになる。寒さや痛みに対して、感覚の鈍さが見られ、転んで怪我をしても泣くことがない。

〈言葉の発達〉

呼ぶと振りかえることが少しずつ増えてくる。給食を立って食べて、保育士に注意されると、落ち込む様子が見られる。保育士の指示が少しずつA君に伝わってきている。言葉の理解力がまだ未熟であるため、活動の切り替えがうまくいかない。次の活動を示した視覚的の手がかりカードを用いて対応する。

*ASD児は、個人差はあるが、音や臭いなどの感覚過敏がある反面、痛みの感覚が鈍いという特徴がある。

【2歳半から3歳の時期】

〈園での生活の様子〉

自分より小さい1歳児に対して嘔みつきが出てきた。母と別れるときに、母を追って泣くようになった。集団から離れたところにいることが多い。

〈言葉の発達〉

「マンマンマン」と喃語を呟きながら、粘土をちぎって並べる遊びをする。電車の絵本を見て、保育士の手首を握り、動かして好きな車の上に持ってくる(クレーン現象)。これは何？と

いう感じで、「エッエッ」という。保育士が「トラックだね」というと、その動作を何度も繰り返して、保育士に「トラックだね」と言ってもらい、音を確認している様子が見られる。その後、喃語が次第に明確になり、「バイバイ」が言えるようになった。また、「ちょうだい」が分かるようになった。

*ASD児は、並べる遊びをよく行う。混沌としたASD児の知覚する世界の中に、一定の規則性を作り出すのが心地よいのではないかと考えられる。養育者の手首をつかんで要求を示す「クレーン現象」は、自分の望むことをしてくれる「手」に思いを伝える動作で、ASD児によく見られる。

【3歳から3歳半の時期】

〈園での生活の様子〉

嘔みつきがあるため、目が離せない。絵本を逆さまに見ている。興奮して走り回り、高い所に登ることが増えた。食事は手掴みで食べる。

〈言葉の発達〉

「イライナイ」、「キタ」、「ミテ」という言葉が出てきた。おうむ返しが多いが、理解力が上がってきた。CMの印象的な言葉を何度も繰り返す。一語文が少しずつ増えてきた。

〈保護者の動き〉

3歳児健診で、医療機関への受診を勧められる。脳の検査を受けるが、異常はない。

【3歳半から4歳の時期】

〈園での生活の様子〉

クラスの部屋が変わり、フラフラとクラスを離れることが多くなる。人のいないホールにいることが多い。お昼寝ができなくなってきた。生活の流れが分からず、視覚的の手がかりや声かけで知らせている。フォークを使って食べるできるようになった。運動会は座っていることができず、参加できなかった。

*ASD児は、テンションのコントロールが難しいため、お昼寝ができないことが多い。

〈言葉の発達〉

「ボールちょうだい」など二語文が出てきた。発音も明確になってきた。家で見ている「しまじろう」のビデオの独り言が多い。

〈遊びの様子〉

「しまじろう」の世界に入り、独り言を言いながら、人のいないホールで一人で遊んでいる。

【4歳から4歳半の時期】

〈園での生活の様子〉

日々の園生活でよく使う指示が理解できるようになった。注意されると怒って叩いたり、おもちゃ箱をひっくり返したりする。お楽しみ会は、カメラのフラッシュに驚いて参加できなかった。

〈言葉の発達〉

落ち葉を貼るときに「ペタン」と言いながら貼るなど、言葉と行動が繋がってきた。「せんせいとやるの」、「いっしょにいて」、「おいで」など人を求める言葉も出てきた。よく見るビデオの台詞「いっしょに遊ぼう」を独り言でよく言っている。絵本を見ながら「モルルール」とおうむ返しをしている。

〈遊びの様子〉

ブロックを組み立てることはできないが、友達が組み立てたブロックに関心を持って遊ぶ。

【4歳半から5歳の時期】

〈園での生活の様子〉

クラスの生活の流れが理解できるようになる。クラスで行うゲームには参加するものの、ルールがよく分かっていない。保育士を「ママ」と呼ぶ。お昼寝で寝られない日が増え、皆が寝ているホールで奇声を上げてしまうため、お昼寝の間、保育士と共にクラスにいるようになる。

〈言葉の発達〉

「だいさんもん…」など、ビデオで見た内容の独り言がよくみられる。

〈遊びの様子〉

独り言を言いながら、三輪車をタンクローリーに見立てて遊ぶなど、イメージを持って遊ぶ様子が見られる。ハサミを上げ威嚇するザリガニを見て、その様子のマネをして見せる。

〈保護者の動き〉

保健所から発達障害の相談機関を紹介される。そこで行われる療育プログラムに週1回通い、母も発達の相談を受けることになる。その機関の医師から自閉症の診断を受ける。

【5歳から5歳半の時期】

〈園での生活の様子〉

運動会の練習は、A君にとって難しい課題であり、参加はできないが、担任の保育士がA君にも参加ができる大きな布を広げるダンスを取り入れてくれた。A君は、そのダンスには興味を示して参加する。運動会は入口の門のところでもいつも

と違う園の雰囲気不安を感じ、「いや」と言って園内に入れなかった。遠足でも博物館の中に入ることができなかった。かんしゃくを起すことが増え、床に寝そべって怒る。

〈言葉の発達〉

「〇〇くんオカシカッタ」など友達の名前が出てきている。クラスで行った劇の出し物である「ブレーメンの音楽隊」の独り言をよく言っている。

〈遊びの様子〉

ホールの積み木を船に見立て「センチョウサンアレガウミダ」とビデオのシーンを思い出しながら遊び、「センセイミター」と保育士に声をかける。食事の時間が来てもなかなか動かないが、保育士がA君のファンタジーを尊重して「一緒に海を見に行こう」と声をかけ、A君をおんぶしてクラスへ戻る。

〈保護者の動き〉

運動会に入ることはできなかったが、母は「門の前まで来られただけでもすごいこと」と日常とは異なる場面が苦手なA君に理解を示した。

【5歳半から6歳の時期】

〈園での生活の様子〉

お楽しみ会の時は、園内がいつもと違う様子であるため、門から中に入ることができなかった。七夕の食事会では、ホールでの人の多さに落ち着かず、不安になり、保育士の膝に顔を伏せてしまい、食べることはできなかった。日常の保育場面で予測がつかずパニックを起こしそうになっても、保育士との信頼関係の中で落ち着くことができる。他児の真似をして行動することが増えてきた。歯ブラシを網にこすって作るブラシ絵に他児が取り組む様子を観察する。他児がブラシ絵を完成させて、場所が空き、保育士が1対1で対応できるようになった時を見計らって、自分もブラシ絵に挑戦する形で、活動に参加することができた。

〈言葉の発達〉

日常場面で簡単な会話のやり取りが成立するようになった。独り言はみられるものの、「〇〇ちゃん、あしまっくろ、いけないなだよ」など、状況にあった言葉が見られる。

〈遊びの様子〉

お風呂の中から動物が出てくる絵本が気に入り、保育士によく読んでもらっている。

【6歳から6歳半の時期】

〈園での生活の様子〉

運動会は初めて、予想以上に参加することができた。園庭に他のクラスが遊んでいるときは、自分のクラスの順番が来るまで待つことができるようになった。お別れ会の練習は興味を示さなかったが、お別れ会には参加することができた。卒園式も、立ち歩く場面もあったが、卒園証書をもらうことができた。

〈言葉の発達〉

「はい」や「いいえ」で答えられるような言葉のやり取りは成立するようになったが、相手の話は理解できず、クラスの活動に入れない。独り言を言っているときは、何を言っても耳に入らない。

〈遊びの様子〉

教室の隅で自分の世界に入り、人形や車などを動かして遊んでいる。

〈保護者の動き〉

就学児健診が近づき、特別支援教室のある隣の学区の小学校に通わせたい母親と、特別支援教室のない地元の学区に通わせたい父親の意見が食い違っている。父親は「A君が自閉症である」という状態を受け止めるだけで精いっぱいである。行くべき小学校がなかなか決まらず、A君も「がっこういかない」と言うなど、困惑していた。母親はネットの自閉症サイトで仲間を作り、情報を集めて検討した結果、父親を説得し、特別支援教室のある小学校へ行くことになった。

(2) アスペルガー一症候群の疑いのあるB君
B君は1歳の頃から保育園に通っている。

【1～3歳児の時期】

〈園での生活の様子〉

1歳児のころより、担任の保育士は、応答性の希薄さを指摘していた。気に入らないことがあると物を投げ、かんしゃくを起こすことが多い。他児がおもちゃ使っている、使っていることがわからず、おもちゃだけに注目して取ってしまうので、他児とのトラブルが絶えない。

〈言葉の発達〉

2歳7ヶ月頃より、「マルサンカクシカカー」など、ビデオに出てくるようなフレーズを繰り返し淡々と言うようになった。保育士が「どうしたの?」と問いかけても、「ドウシタノ」と返すようなおうむ返しがよく見られる。名前を呼ばれて返事ができる。ク

ラスの皆が輪になって、絵カードをとるゲームでは、「アイスクリーム」などのカードの名前をいうことができる。

〈遊びの様子〉

クラスの子ともと一緒に遊ぶことはなく、窓枠を線路に見立てて、小さな汽車のおもちゃを「ゴトンゴトン…」と歩いて走らせる遊びを延々と繰り返している。保育士が、そばにいて一緒に「ゴトンゴトン」と言っていると、目が合うことが増えてくる。

【3歳から3歳半の時期】

〈園での生活の様子〉

保育士との関わりが少しずつ増え、しっぽりなどの遊びが分かるようになる。保育園での生活の流れがつかめない。おもちゃを他児が使っているかどうかはまだ分からず、おもちゃを取ってしまって、他児とトラブルになると、すぐ手が出てしまう。何かに没頭しているときは、声をかけても反応がなく、目の前で視覚的手がかりのカードを示して知らせる。

*ASD 児は、耳からの指示が入りにくいため、視覚的手がかりが有効である。

〈言葉の発達〉

「デンシャノオトダ」など意図を持った言葉も出るが、独特の単調な、機械的な口調で話す。目は泳いでいるが、一応座って話が聞けるようになる。絵本を見ながら、「これはカボチャ」、「てんとうむしだよ」と言うことができる。

〈遊びの様子〉

電車遊びなど自分の世界に入っているときは、周囲がまったく見えなくなる。水遊びを好む。保育士に追いかけられる遊びを楽しむ。その時は保育士の動きを確認しながら行動している。

*ASD 児は水の感触を好むため、水遊びが好きな子どもが多い。

〈保護者の動き〉

3歳児健診では、特に問題の指摘はされなかった。

【3歳半から4歳の時期】

〈園での生活の様子〉

自分が遊びたいおもちゃを、「かして」と言えず、取ってしまうため、他児とのトラブルが絶えない。

〈言葉の発達〉

「これは〇〇線」など自分の興味がある電車関係の言葉は、

イメージできるが、「おやつを食べにホールへ行こう」などの保育士からの指示的な言葉は、おうむ返しをするだけで意味が分からない。独り言が多いが、保育士が独り言に相槌をうつと、目が合う回数が増える。

〈 遊びの様子 〉

パズルなどの遊びを好む。パズルの絵で推論してつなげるというよりも、形を見てつなげているため、パズルを逆さまにして、白色の面にしても、繋げて完成することができる。

【4歳から4歳半の時期】

〈 園での生活の様子 〉

公園へ散歩に行く際、「トラックだー」と車の方に注意を向け、列からフラフラと離れてしまうので、目が離せない。

お誕生日会など座っていることが必要なときは自分でぶつぶつ独り言を言い、電車になって座っている。クラスの子たちがけんかしてもめている状況がつかめず、そのなかに割って入って、「君も電車になろう」と勧め、けんかに巻き込まれてしまう。

〈 言葉の発達 〉

「やめて」、「じゅんばん」が言えるようになる。

「トンネルです」など理解可能な言葉もできるが、ビデオのナレーションを繰り返す独り言が多い。口調は機械的な紋切り型である。

〈 遊びの様子 〉

保育士はB君の電車のファンタジーの世界を尊重し、遊びによく付き合うように心がけて保育している。一人での電車遊びの時に、保育士に自分の頭を指さして「このボタンを押して。」といって、頭の架空のボタンを押してもらい、自分が電車になりきって、止まる様子を表現するなど、B君も、しだいに保育士と遊びの世界を共有するようになる。おままごとでは、一人で何役もやっしまい、相手が何の役をやっているかという視点が欠けている。

【4歳半から5歳の時期】

〈 園での生活の様子 〉

「ピーポー」と奇声を上げるようになる。しりとりはできないが、給食を班の皆で待つときに、「み、がつくのはなんですか」とクイズを出して、他児と会話している。

他児が「イヤ」といっても、嫌がっているサインが理解できない。

〈 言葉の発達 〉

自分が電車になりきって、手を目の前でくるくると動かしながら「このSL、C38号の姿をわれわれは決して忘れないでしょう。プレゼントのお知らせ・・・」など家で見ているSLのビデオのナレーションのせりふを録音したようにそっくりそのまま繰り返して独り言をいう。

〈 遊びの様子 〉

ぴよんぴよん跳んだり、目の前で拍手をするなど、視界が動くのを楽しむ(*ASD児によく見られる常動行動)。

自分が汽車になる一人遊びの空想の世界に入っていることが多い。

保育士が、その空想の遊びに介入しても、明確なやり取りは成立しないが、保育士と向き合って話している。時には、自分のファンタジーの中に保育士を引き入れて遊ぶこともある。

〈 保護者の動き 〉

母親は、B君が友達と関われないことを心配し、園長先生に相談した。保健所の発達相談に行くことも考えたが、本児の父親や父方祖父母に「そんなところへ相談に行くことは必要ない」と言われ断念する。

【5歳から5歳半の時期】

〈 園での生活の様子 〉

運動会ではリレーなどの演目をこなした。先の見通しがつかず、周りに誰もいなくなる状態にならないと、次の行動に移ることに気がつかない。他児の様子をしばらく観察して真似をするようになった。他児にブロックを壊したことを責められるが、何も言えずにいる。他児が使っているブロックと使っていないブロックの区別がつかず、他児とトラブルになる。空想の世界に入っているときは、声をかけてもすぐに動けない。

〈 言葉の発達 〉

新年お楽しみ会では、福笑いなど皆が笑うシーンで笑っておらず、内容が理解できていない。

〈 遊びの様子 〉

園庭でわざと靴底を地面に擦って砂煙をあげて歩き、一人でSLになる遊びに没頭する。SLになった姿を、保育士や他児に見てもらいたいため、人前で砂煙をあげるが、他児の目に砂煙が入ってしまう。保育士は、砂煙がたちにくい場所に線路を書き、「SLはここを走ってね」と頼むと、B君は理解して、その線路を走るようになり、砂煙のトラブルはなくなった。

【5歳半から6歳の時期】

〈園での生活の様子〉

園児がお店を開くお楽しみ会では、状況がつかめずフラフラしている。「大砲なんだ、ドカーン！」と、手を大砲の玉に見立てて動かし、自分の空想の世界に入る。一度空想の世界に入るとなかなか抜けられず、食事の支度を全く忘れてしまう。視覚の手がかりを用いて次の予定を伝え、スムーズに動くことができる。

〈言葉の発達〉

家で見ているお気に入りのビデオ、「こげぱん」の話を一方的に話す。保育士が「こげぱん以外のパンはあるの？」と聞いても、答えはなく、自分が話したいこげぱんの話を一方的に話し、会話は成立しにくい。

〈保護者の動き〉

就学児健診を前に、母親が再びB君のコミュニケーションのとれなさが心配になり、保育士の勧めで相談機関に来談する。知能検査の結果、他者の表情やその場の状況がうまく読み取れていないこと、理解力が低く、会話が成り立ちにくいこと、対人関係の状況や文脈が読めないこと、言葉を頭の中で組み立てる力が未熟であることなどが指摘され、アスペルガー症候群の疑いが指摘された。小学校においても、普通学級に席をおきつつ、学習面で混乱がみられたときには、特別支援学級に通級し、丁寧な指導を受けた方がよいと助言された。

事例についての考察

(1) 環境の調整

ASD児の特徴を理解しながら、周囲の状況が読めないゆえの困難さが起こらないように先の見通しを伝え、本人の得意な行動を評価しつつ、特性を生かした過ごし方ができるような支援が必要となる。先の見通しを知らせるために、視覚的手がかりを使用したり、登園時に1日のスケジュールを伝えるなどの対応が有効である。

(2) ファンタジーに寄り添うことの大切さ

表情が読めず、共感性に乏しいASD児でも、共感を求めている。人として存在していくうえで、共感やそこから形成される基本的信頼感は重要である。ASD児はミラーニューロンの働きが十分でないため、自閉の程度が重いほど、基本的信頼感の形成が遅れる。A君のケースからもわかるように、健常児では1歳以前からみられる、母子分離時の母への後追いが、2

歳半から3歳の時期に見られている。ASD児は、健常児よりもゆっくりと、基本的信頼感を形成していくのである。その形成を支援していくため、親や保育士がASD児のファンタジーの世界に寄り添うことは重要である。ASD児が自らの空想の世界に入っているときは、大人しくしていることも多く、近寄りがたい雰囲気もある。しかし、保育士がそこに介入して、ASD児の遊びに合わせていき、「気持ちを共有してもらうことの楽しさ」をしっかりと経験させることが、ASD児の基本的信頼感、他者への関心を形成する上で必要となる。

B君のケースでも、電車のファンタジーの世界に保育士が寄り添うことで、他者への関心が薄いB君と目が合い、やり取りが成立するようになる。これは、B君が5歳の時の「SLになった姿を保育士やクラスの友達に見てもらいたい」という思いにつながっていく。このような他者へのB君の思いは、今後他者への相手の立場に立って考える力を形成していくうえで、重要な動機づけとなっていく。ASD児は、一度インプットされたことは、その後も律義に守るため、「先生は自分のことをわかってくれる人」というイメージが園の生活の中で定着すると、その後、小学校や中学校においても、そのイメージが継続していくというメリットもある。

(3) 保護者への支援

生後すぐに診断がおりのダウン症のようなケースよりも、2～3才までの間自分の子どもは健常児であると思っていたのに、そうではなかったと診断された、発達障害のケースの方が、保護者の障害受容が難しく、時間もかかる。反面、「自分の育て方のせいではなかった」とほっとする部分もある。

発達障害児は、しつけが出来ていないと見られることが多い。親は、「何とか子どもに言うことをきかせよう」と厳しくしかることが多い。しかし、子どもはしかられることにより、自信をなくしてますます落ち着かなくなったり、うつになったりなどの二次障害を起こしてしまうこともある。このような悪循環から、親自身が自信をなくし、心が傷ついてしまっていることが多い。このため、まず親がとても苦労してこの子を育ててきた努力を認め、親の頑張りを評価する言葉をかけることが大切である。

親のこれまでの努力を褒めて、支え、親の話によく耳を傾けることを通して、親との信頼関係を作っていく。発達障害の子どもにとって、褒められて自信をつけることが大切であるが、親は叱ることが多く、褒めることが難しい。保育者が親の努力を認め、褒めることによって、親も子どもを褒める心のゆとりが

持てるようになる。このように、保育者が親をよく理解して、子どもの長所から話題にしていくなど、子どもの問題を母親に受け止めやすい形で伝えることが大切である。

また、上記の2つのケースで見られるように、卒園を控えた就学の問題が出てくるときに、父親の理解がなく、母や本人がストレスを感じるケースが多い。母親は保育士に相談したり、相談機関に行って専門家と話すことによって、子どもの特性への理解を深めていくことができる。しかし、父親はそのような理解の場から取り残されてしまうのである。保育場面で父親と接する機会があれば、父親の関わりを評価するなど、積極的に父親を支援していくことが望ましい。

(4) 専門機関に紹介するには

発達障害の場合、保育士が発達障害の可能性に気が付いて、保健所などの専門機関に相談を勧めることもある。その際は、「困っているから、障害の可能性があるから、相談に行ってください」という言い方ではなく、「相談に行くともっと成長しますよ」と、相談に行くことについてポジティブに伝えることが大切である。「今、成長してきているところです。専門家のアドバイスをもらうともっと伸びると思うので、行ってみませんか?」とすすめてみるとよい。

保護者が、保育士との話を避けるようにさっと帰ってしまったり、なかなか話ができないなど、連携をとるのが難しいケースの場合、子どもの長所の話から入り、少しずつ家庭での様子を教えてもらうことによって、少しずつ信頼関係を築いていく。

また、専門機関を紹介する際には、両親が問題児扱いをされたショックを受けないような言い方を心がける。一度ショックを受けてしまうと、その後再び勧めることが大変難しくなるので、あせらないことが大切である。専門機関を勧められる段階までこぎつけるのに、何年もかかる場合も多い。クラスが変わったときに、先生と保護者との関係性が後退してしまわないように、クラスが変わる際の引き継ぎが重要である。

おわりに

乳幼児期に発達障害の可能性に気づき、保健所の発達相談や発達障害者支援センターに繋いで、早めに支援を受けることで、子どもの将来が変わってくる。小学校以降、必要な支援を受けることができれば、うつなどの二次障害を発症するリスクも少なくなり、持っている力を伸ばすことができる。

また、周囲の子どもは保育士の対応する姿を見て、気にな

る子への対応を学ぶ。この対応方法を身に着けた子どもたちが、気になる子どもの「良き理解者」となって小学校、中学校と気になる子を支えていくケースが多い。それゆえに保育士が、気になる子への特性に気づき、適切な支援をしてあげることが、気になる子の将来にとって重要になってくるのである。

<引用文献>

Sato Wataru*, Toichi Motomi*, Uono Shota & Kochiyama Takanori (*equal contributors) (2012) Impaired social brain network for processing dynamic facial expressions in autism spectrum disorders. BMC Neuroscience, 13:99 (<http://www.biomedcentral.com/bmcneurosci/>)

(京都新聞(8月18日27面)、産経新聞(8月18日22面)、日本経済新聞(8月19日34面)および毎日新聞(8月18日29面)に掲載された。)

瀬戸和佳子 他 2014 和歌山市における5歳児相談事業の経過—心理士の役割と支援目標の考察— 心理臨床学会第50回大会論文集

辻井正次 1996 自閉症児者の「こころ」を自閉症児者自身が探し求める場 辻井正次 イマーゴ、7(11)109-121

Trevarthen, C. 他 1998 Children with Autism 自閉症の子どもたち 間主観性の発達心理学からのアプローチ 中野茂/監訳 伊藤良子/監訳 近藤清美/監訳 ミネルヴァ書房出版 2005

吉岡恒生 古田祥一郎 2011 箱庭の中で誕生を繰り返した広汎性発達障害時の事例 箱庭療法学研究 24巻1号

